

父が虐殺 戦中の日記

1937年からの日中戦争に送られた父親は、数々の残虐行為を日記に残した。「これが、あの優しかった父ちゃんのことなのか」。息子は事実から目を背けてはいけなと、17日に大阪市で、父親の「遺言」を語り伝える。

戦争の苦悩 息子が語る 17日大阪・北区

山本敏雄さん(68)は福井県鯖江市の父武さんは37年9月、39年6月、中国戦線にいた。戦後、戦場で記していた日記をもとに回顧録を書き、84年に70歳で死去。原稿は翌年、「一兵士の従軍記録」として自費出版された。

「上陸するや、落雷のごとき砲弾の炸裂する轟音にまず肝を冷やされる」(37年9月30日)

部隊が上海から当時の首都南京へ向かう途中、頭や手足を吹き飛ばされて死んでいく仲間を目の当たりにするうち、恐怖は憎悪へと変わっていく。

「(捕虜を)ただちに殺す」「胸がスーとして気持ちよくなる」「これで亡き戦友も浮かばれる」(37年12月11日)

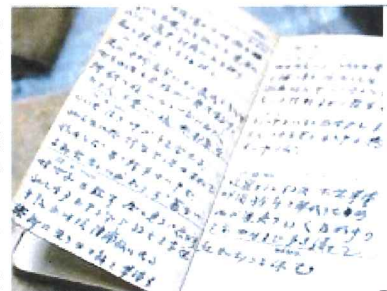


父が戦場から持ち帰った日記を読む山本敏雄さん＝福井県鯖江市

南京を占領後、部隊は中国大陸を転戦する。

「一般男子住民多数を捕えてくる」「刺突訓練を兼ねて十数名を死刑執行」(38年5月16日)

「町々で目ぼしい金品を強奪して来たり、姑娘を強姦したり、良民を殺害したり、皇



虐殺について記した武さんの日記。「婦女子を殺す」と書かれている

弾の使用、慰安所……。日本軍の実態を赤裸々に明かした本だが、書かれていないこともある。

38年5月のある村。本では「なんら抵抗はなく、部落の老幼婦女子総出で日の丸の旗を持ち」となっているが、戦中の日記によると、「女も子供も片端から突き殺す。惨酷の極みなり。一度に五十人、六十人、可愛い、娘、無邪気な子供、泣き叫び手を合せる」だった。

ある朝の父の姿が忘れられない。山本さんの次女をあやしていた父は唐突に、「こんなかわいい子をみんな殺してしまった」とつぶやいた。父は生涯、戦場での行為に苦しんでいたのだと思う。日記からさえ破りとられた

「女も子供も殺す」温厚な人柄一変

出来事もある。

召集令状を受けとった37年9月、24歳の父は11月に挙式予定の婚約者の家を訪ね、急ぎの初夜を迎えた。その感動がみずみずしくつづられていた。山本さんが内容を知っているのは、破りとられる前にのぞき見たからだ。約2年後に帰国した父は結婚。山本さんたち5人の子に恵まれた。

そんな恥じらいのある父を、「手を合わせて拝むあわれな敗残兵をば、銃剣で突き、棒でなぐり、石で頭を割って叩き殺し(略)胸のすくやうな思ひ、その後人殺しをした後は、却って飯がうまい」(37年12月11日の日記)へ一変させたもの。それが戦争だと山本さんは考える。

特定秘密保護法の制定、集団的自衛権の行使容認、「共謀罪」と突き進む安倍政権が恐ろしいと言つ山本さんは「人を憎悪の連鎖に突き落とすのが戦争。子どもたちに経験させたくないと言っていた父の体験をこれからも語っていく」。

「父の証した記憶を辿って」は13時半、大阪市北区のPLP会館で。800円。問い合わせは南京60・大阪(080・33822・0404)へ。(下地 敬)